

# 橋本関雪『南船集』小考

——山田俊雄先生を偲ぶ——

枋尾 武

## はじめに

この文章を書くに当り、はじめに先生を偲ぶ思を少し述べ、次いで画人関雪の中国旅行を題材にした漢詩集『南船集』の第一首たる「汽車過赤城」について解を加え并せて、全書を通して旅行の次第を考えてみたい。この詩集の題名は「南船北馬」の南船を意味している所に注目し、論を進めたい。

## 山田俊雄先生を偲ぶ

山田俊雄先生が身罷られてから数箇月を経過してしまった。偲ぶ会も去る十月二十三日、先生縁りの本郷の求道会館で行

われた。築島裕氏の挨拶と山田家の本家筋の富山稻荷神社宮司の山田方輝氏の献杯があり、曾祖父の代から孝雄氏、そして俊雄先生へと脈々と連る学統の紹介があつた。先生についての業績については築島氏が紹介され、成城大学に於ける業績については田中宣一氏が民俗学研究所ニュース七十号に詳細に書かれているので重複を避ける。今書くことが出来るとすれば先生と私との出会いから成城大学に於ける二十数年のおつきあいぐらいしかない。

私が成城大学に招かれたのは昭和五十二年である。文芸学部がコース制を採っていたのを学科制に改変する時、国語の教員免許状を出すのに国文科に漢文を担当する教員が必要になつたからである。コース制の時は文化史の詩人で東洋史専攻の田中克巳氏が担当しておられた。

この年法学部が新設され五号館が出来た時である。尾形佑

氏も教育大学から来られ、五号館に研究室が置かれた。私は俊雄先生からの紹介で桜美林大学から移って来たのであるが、先生との御縁は四十数年前大学院生の頃で、その頃京華高校の非常勤講師をしていて、当時国語科教諭であった伊藤博之氏の紹介を受け、亀井孝氏、俊雄先生等の園外文学会という集りに加えていただいた。園外文学会とは『万葉集』とか『源氏物語』等国文学の主流の作品に対してあまり知られていない文学作品を指す。この会のメンバーは三氏の他に小山弘志、大島建彦氏が居られ、私は最年少の二十七歳であった。いずれも一言を持った学者で教わることはかりであった。中でも亀井先生と俊雄先生は言葉の解釈に厳しかった。俊雄先生は言葉について該博な学殖を持っておられ、多言ではないが、辞書にない深い言葉の意味を披露された。その時に採り上げられた作品の一つに『玉造小町子壮衰書』があり、この縁で佐竹昭廣先生の勧めも受けてこの作品を研究することになった。今になってこれだけの大先生達に囲まれ育んでいただいた幸運を感じる。

このように先生を回想していると画風は異なるが、私の好きな関雪が頭に浮び、関雪の『南船集』について書いてみよう

と思った。

### 関雪の『南船集』について

俊雄先生はこよなく言葉と絵を愛された。絵は学部長室や学長室に飾られていたので知る人は識るのであるが、自作の水彩画は特に風景画が印象に残る。フレッシュマンキャンプの会場であった忍野のホテルの庭の雪景色が淡彩で描かれていたりする。こつてりとした油絵風ではなく、先生の人柄をよく表わしている。

日本画の大家である関雪の漢詩集『南船集』について書いてみたい。関雪は明治十六年（一八八三）十一月十日神戸に生れ、昭和二十年二月二十六日に死去する。父は明石藩儒海関である。関雪と共に中国を旅した時（大正九年―一九二〇）の漢詩集『一葦航吟』（大正十一年―一九二二刊）を著している。関雪は四条派画家の片岡公曠や京都の竹内栖鳳の門に学ぶが、やがて離れ、我が道を歩く、文展や帝展等で活躍するが、天才に有り勝ちな人柄で誤解を受けたり、評論家に不評な所もあり傲岸な不遜な人物に見なされていたらしい。大正五年（一九一六）三十三歳の時、浄土寺石橋町に豪荘な

白沙村莊を完成させた。今は橋本関雪記念館として一般公開されている。

関雪は創作の傍ら中国旅行をし、絵を描き、漢詩を作っている。絵については今回は触れない。大正二年（一九一三）中国を旅行、この時に作られた漢詩が『南船集』として大正四年（一九一五）に出版されている。この詩集には序があり、旅程が書かれている。詩集の第一丁には 南船集 関雪 橋本貫一稿に始まり、詩を載せる。一九七三年一月に開かれた「独往の画人 橋本関雪展」の年譜によると「幼名成常、後、関一と改む」と記す。ところが詩集は関一ではなく貫一とする。記念館に正せば良いのだが、詩集の貫一の方が正しいのではなからうか、

ここで序を読んでみよう。

癸丑の歳（大正二年＝一九一三）五月、余將に峨眉山に遊ばんとす。船を上海に寄せし時、革命の乱再び起らんと欲す。上下紛擾し、人心恟恟たり。期は既に霖霖に入り、江水汎濫す。長江の險最も恐る可き也。因りて路を転じ、杭蘇の間従り会稽山陰に赴き、蘭亭觴詠の遺跡を觀る。更に長江に泛び、三峡の勝を過ぎ、四川夔州府に到りて止まる。此の間の行程凡そ数千里なり。時に臨ん

で獲る所の詩数十首、是れ丹青の余伎（技）のみ、未だ以て記するに足らざる也。此の行や予さきに劍を把り、遼北の野を縦遊せり。今復た筆載て巴蜀の間に泛ぶ。若し夫れ長城の雄、秦棧の杜の如きに至れば、則ち他日更に焉に登躋し、風雲を收攬し、靈異を披撥し、以て素練の上に落ちんか。歳次乙卯（大正四年＝一九一五）重三の日（三月三日）、著者東山淨因室にて識す。

と。○峨眉山は四川省峨眉山市にある名山。仏教・道教の聖地。岷江の西に位置する。○革命の乱とは中華民国二年（大正二年）五月に漢陽兵工廠にてストライキ、七月十二日には江西省の湖口で国民党の李烈鈞が独立宣言、第二革命の口火を切る。十七日から八月八日にかけて安徽・湖南・広東・福建・四川に於ても独立し討袁軍を組織した。○会稽山陰とは浙江省杭州の南東にある紹興市の西南にある蘭亭県。○江蘇の間とは王羲之にまつわる浙江省の遺跡から錢塘江、西湖、江蘇省の楓橋、寒山寺、南京（金陵）、秦淮等を指す。○蘭亭觴詠の遺跡とは晋の王羲之が東晋の永和九年（三五三）三月三日、蘭亭に於て飲酒し詩歌を作る曲水の宴を行った遺跡。○長江に泛ぶとは寒山寺から楓橋を経て長江に入り、南京を過ぎ三峡に達したか、寒山寺（蘇州）から鉄道にて江寧（南

京)に入り長江に泛んだとも考えられる。大正二年には鉄道は開通している。○三峡の勝とは湖北省宜昌の上流の南津関より秭帰までの西陵峡、巴東より四川省巫山までの巫峡、白帝城のある奉節周辺の瞿塘峡の三つを三峡という。○四川夔州府とは奉節県を指す。関雪は峨眉山までには至らず白帝城に至って三峡を下つたらしい。○行程凡そ数千里とは上海より奉節に至る旅程と考える。奉節と南津関までの三峡の全長は二四〇キロメートル(四八〇華里、約六一・一日里)。○詩数十首とは『南船集』中の自作詩は九十六首。○剣を把りとは集中第一首の承句の剣書北馬を指す。○遼北の野とは赤城の地、旧熱河察哈爾、今の河北省赤城県を含む旧満州ないしは内蒙古の地を指すと考えられるが、其昀主編、中華民国五十五年(一九六六)台湾刊の『中華民国地図集中国北部』(D1・D2)には遼北省が見え科爾沁右翼後旗、前旗、中旗、科爾沁左翼中旗、後旗等旧吉林省、遼寧省、熱河察哈爾(内蒙古と河北省の一部)に挟まれた地。○巴蜀の間とは巫山より奉節の間。○長城の雄とは万里の長城の雄大さをいう。○秦棧の壮とは秦の時代に築かれたという棧道。棧道とは險阻な地に穴を開け棒を通して板を張って路とした。小三峡の棧道は有名。壮は壯観。○東山淨因室とは関雪郎である淨土寺石

橋町に築かれた白沙村莊であろうが、この邸の工事は大正四年に始つたので、序が書かれた同年は未完成で仮屋であつたと思える。一応の完成を見たのは大正五年である。この序によつて旅程の概要はつかめる。

### 「汽車過赤城」を読む

湖海清狂傲少年 湖海の清狂傲れる少年。

劍書北馬又南船 劍書北馬また南船。

青燈一点林扉出 青燈一点林扉より出で、

応照家人夜話辺。 応に照すべし家人夜話の辺。

○汽車赤城を過ぐとは、自動車で赤城を通過することをいう。赤城は今の河北省赤城県。旧直隸省宣化府。清朝(満州族)の故地である。○湖海とは世の中。○清狂とは放逸で俗人離れをしていること。○傲れる少年とは関雪その人であろう。大正二年当時三十歳。序に見える「剣を持って遼北を旅した」のはこれより以前二十二歳の時であろう。○劍書とは剣を把りて北馬、書を携えて南馬の意。南船北馬の意である。『南船集』に心引かれたのはかつて南船北馬の語の由来を考証した<sup>3)</sup>ことによる。○青燈とは燈火の青い炎。○林扉とは林

を扉に見立てて林の扉から青い炎が漏れ出たことをいう。あるいは扉を扉の誤りとすれば林のもやの中から青い炎が漏れ出る意となり、「林扉出で」と読む。結句は家人の夜の団欒を照らす燈火である。

この一首は上海より三峡の旅を目指した関雪の心意気を詠じたもので巻頭に置くに相応わしい。

### 杭蘇三峽の旅

関雪の旅を詩題を中心に述べてみたい。なお、次の1a6は『南船集』一丁の表六行目の意で以下同じ。本稿末の地図も参照。

○1a6 上海雜詩——大正二年五月、船にて上海に上陸。今

江蘇省中にある国の直轄特別市。長江の河口にある。

○1b7 江南の客たる次、邦人塩川某、繭を買ひ平山に到

るに逢ひ、終に相携へて西興に到り、將に此に分賦

する——平山は河北省西方太行山地区にあり、滹沱河

が貫流する。繭の産地であらう。西興は浙江省蕭山

県の西、運河に臨む。詩中の南星は5b8参照。越中は

今の浙江省紹興市。

○2a6 西興舟次——西興に向う舟中。蕭山県は紹興市に隣

接している。

○2b1 硯池——王羲之が硯を洗ったという池。紹興市臥龍

山の東北。羲之の旧宅中にあつた。

○2b4 王右軍宅址——址、紹興府王家山下に在り、棟宇已

に廢す、今の戒珠寺是れ也。僧房半分は学養と為り、故に及る。王家山は王羲之の旧址。晩年の旧居だと

嵯県金庭山に墓所や祠堂がある。

○3a2 寺中に羲之の塑像を祀る云々——右の宅址参照。

○3a6 婁虎阜に泊す——未詳。

○3b1 蘭亭——浙江省紹興市の西南。王羲之が蘭亭会を開

き曲水宴を行った所。詩中洗硯池、觀鵝欄、文昌閣

等が見える。洗硯池は羲之の旧宅にあつたとも

（『太平實字記』）。硯池参照。

○3b5 紹興舟次——紹興市中をめぐる河川や鑒湖中を移動

したと考えられる。

○3b8 江南雜詩——紹興市の南、錢清の南西に江南あり、

水辺にある。あるいは江南地方を指すか。

○4b3 普照寺——江蘇省宿遷市の東南に泗州普照寺があり、

宋の宏智禪師が住したというが、旅程からやや離れ

ているので、別の普照寺があるのかも知れない。

○4a7 夜柯橋を發し浮橋を過ぐ—紹興市の北西に柯橋鎮がある。浮橋は浙江省桐廬県の富春江に流入する分水江の下流に浮橋阜がある。舟の旅である。

○4b2 興に乗じて浮橋を歩く—この浮橋は浮橋阜にあつた浮き橋であろう。

○4b5 此夜天晴月色如秋（中略）終宵唱歌し、曉に西興に到る。雨有り—西興は1b7 2a6 参照。

○5a1 舟西興に到る—5a4 「雨を冒して曉に發す」とあるように翌朝西興を出発する。この旅程は紹興市の柯橋鎮から運河を経て蕭山県の西興に到り、錢塘江に到る。5a7 「途上口占」の結句に「錢江一幅似銀河」とある。

○5b2 錢塘江に到る—錢塘江は杭州市と蕭山県の間を流れて海に注ぐ、富春江の下流。

○5b8 南星を過ぐ—錢塘江の北岸の鉄道の駅に「南星橋火車（汽車）站（駅）」があるので、この辺に南星という町があつたのであろう。結句に「南星城外始聞鷄」とある。

○6a3 西湖に到る二首—錢塘江の北、杭州市城の西側に

ある湖。柳浪聞鶯、三潭印月等名勝の地で知られる。

○6b4 杭蘇従り再び滬上<sup>フンセン</sup>に到り、將に長江に泛<sup>ふ</sup>び、古河君宅に貽<sup>おく</sup>る—これまでの杭蘇の旅から再び滬上（上海の異称）に到り、長江に舟を泛べ、古河君宅へこの詩を貽った。

○7a1 楓橋—江蘇省蘇州市の西、楓橋鎮にある古橋。唐の張繼の「楓橋夜泊」で有名。江南運河に架つてい

る。

○7a4 寒山寺—楓橋地区にある名刹。寺内にある張繼の「楓橋夜泊」詩が有名。

○7a7 南京に入る—江蘇省南京市。長江が市中を貫流する。金陵ともいう。関雪旅行当時ここを都とする。

○7b2 金陵雜詩（四首）—南京の古名。古都をイメージしての命題。

○8a3 南京城外の風物、凄惨な革命の乱。即ち此に及んで況を記す。—大正二年（一九一三）七月袁世凱が南京を占領し第二革命に失敗した。その悲惨な情況を詩にした。

○8a7 秦淮—南京城中を流れる運河。秦時に造られた。

江蘇省鎮江市句容県に水源を持ち、南京城の南側か

ら北流して長江に流入する。

- 8b4 黄鶴楼—湖北省武漢市武昌区にある楼台。黄鶴と

仙人の逸話で有名。関雪の見た楼は蛇山の黄鹄磯にあつたが、武漢長江大橋を造るに当り、高観山に移された。

- 8b7 漢口に客し夜邦妓を見る—漢口は武漢市の漢水と

長江との合流点の北側の地。

- 9a2 潯陽琵琶亭—潯陽は江西省九江市の長江の別名。

唐の白居易が「琵琶行」を作った。

- 9a5 楊子江舟中所見三首—長江を遡上する舟中の作。

- 9b4 月夜、香山寺に登る—香山寺の位置未詳。承句

「夷陵山色集窓紗」とあるので夷陵にあつた香山寺であろう。夷陵は今の宜昌市。

- 9b7 入峡—注に陸游の『入蜀記』五月十八日の記事を

引く。三峡の下への入口は湖北省宜昌市の南津関。

- 10a3 三游洞に至る途上口占す—三游洞は宜昌市の長江

上流にある。白居易と弟の知退と元稹の三人がここに遊んだ。西陵峡中にある。

- 10a6 三游洞—右に同じ。

- 10b4 兵書峡—湖北省秭帰県の北にある長江の峡谷。諸

葛孔明が兵書と宝剑を隠しておいたという伝説がある。兵書宝剑峡ともいう。

- 10b7 新灘—舟中曉起即事。湖北省秭帰県の東にある。

峡中最険の所という。青難ともいう。

- 11a2 瞿唐峡中の作—瞿唐峡は四川省奉節県の東にある。

三峡下りの最初の峡谷。

- 11b1 天柱峰—天柱山のことが。湖北省長陽土家族自治

県、鴨子口郷劉坪村にある。道観がある。長江の支流清江の北にあり。

- 11b4 古明妃村二首—湖北省興山県の南郊宝坪鎮にある。

漢の王昭君の故里。昭君村ともいう。香溪鎮にて長江に流入する香溪の上流にある。

- 11a1 石門関—四川省奉節県の東北。劉備が孫權と戦い

敗れ、逃げ込んだ関。臥龍山麓の永安宮にて死去したところ。旅の順序からすると16a2

くべきであろう。

- 12a4 屈原故里二首—湖北省秭帰県の東方の屈原にある。

三閭郷ともいう。屈原廟・読書洞・吟詩台・照面井などがある。屈原沱。

- 12b1 楚大夫廟下に泊り、端陽節に逢ふ—楚大夫は屈原。

屈原廟は旧宅の跡地に有る。端陽（午）節に龍舟競漕（ペーロン）が屈原を記念して行われる。

○13a1 帰州城を過ぎる—湖北省秭帰県の上流。『中国文物地図集 湖北分冊上』秭帰県・興山県文物図（一六九頁）によると長江沿岸より下流に屈原鎮、屈原廟があり、帰州故城に屈原祠、屈原故里牌坊が見える。関雪の旅程からすると屈原祠を屈原廟と考えたのであろう。

○13a5 帰州城に宋玉の宅址有り、故に及る—宋玉は屈原の弟子とされる。「神女賦」や騷（楚辭）の「招魂」（いずれも『文選』所収）等の作がある。宅址の所在未詳。

○14b2 巴東県—湖北省西部にあり、四川省に隣接している。巫峡の入口。

○14b5 巴峡—巫峡に同じ。巫山から巴東までの江の名。三峡の一。

○14b8 神女峰—巫山十二峰の一。中でも最も優美。仙女瑤姫が禹の治水を助け神女峰になった。その石の山がその姿に似る。

○15a4 青石洞に泊す—青石洞は十二峰の対岸にある。民

家がある。

○15a8 八陣磧—四川省奉節県の南。八陣図が描かれている河原。瞿塘峡中にある。諸葛孔明が作った軍陣の八つの形式。

○15b3 唱燈児三首—注に「夔州府舟中、夜客の為に琵琶を弾ずる者有り。指して唱燈児と呼ぶ」と。夔州府は四川省奉節県。

○16a2 白帝城址—奉節の下流五キロにある白帝山にある。後漢の光武帝建武元年（二十五）公孫述が築城。井中から白龍が出た。後、蜀の劉備が呉の陸遜と戦い、敗れて白帝城（永安宮）に逃れここで死す（章武三年＝二二三）。関雪はここに至って長江を引き返した。

○16a8 荆門—湖北省宜都県の西北に荆門山あり。虎牙山と対峙。長江は急流。戦国時代の楚国の西方の門に当る。旅程からすると次の宜昌の下流であるので宜昌の後に置くべきである。

○16b3 宜昌に到り宗像二子及び高野生を迎るに似たり—宜昌は湖北省宜昌市。西陵峡の下流に有り、三峡上りの起点の一。



○ 宜昌に客となり夜胡妓を見る。

○ 17a7 長板雄風碑—湖北省當陽市城区にあり。長板は長

坂が正しい。雄風は張飛が曹操に敗れた劉備を救つ

た勇姿。荊州市を流れる長江に流入する沮漳河を長

坂まで舟で遡上したのであらう。

○ 18a1 舟漢口に近く兵馬旁午し、風雲頗る急なり—漢口

は8b7参照。旁午は行き交うこと。

○ 18a5 武昌矚目—武昌は湖北省武漢市の長江の南岸。武

昌區。省政府所在地。

○ 19a4 上海雜詩 上海は1a6 中国の旅の出発点に戻る。

○ 19b2 舟日本に近し—舟にて日本に帰国。

関雪は江蘇、三峡の旅を終え帰国、峨眉山に登り得なかつ

たが、旅の目的はほぼ果せたであらう。南船北馬の南船の旅

である。筆者はかつて『新しい漢字漢文教育』第三十一号

(二〇〇〇年)に『南船北馬考』を書き、近思文庫編輯『日

本語辞書研究』第三輯上、木村晟博士古稀記念(港の人、二

〇〇五年三月二十一日刊)に『南船北馬再考—語の由来を求

めて—』を書いた。この稿もこれを補うものである。山田俊

雄先生のことばの業績にあやかつての所業である。先生の学

燈を消さず、これからことばについて思いを馳せたいと思

う。

### 参考文献

『大漢和辞典』『漢語大詞典』『中文大辞典』等其本文献は参考文献一覧には省略。また、参考にしたが、稿中に直接反映してないものも文献一覧に掲載した。

文献1 橋本貫一(関雪)『南船集』(私家版、大正四年—一九一五年三月)

文献2 橋本海関『一葦航吟』(編輯兼出版人 上野靈雄 大正十一年—一九三二年八月十日)

文献3 橋本関雪画『関雪外史画集』二冊(吉田文治編輯 更正閣 昭和九年—一九三四年三月三日)。

文献4 『橋本関雪素描名作集』三卷(白沙村莊 昭和四十七年—一九七二年二月・六月・九月)。

文献5 読売新聞社『独往の画人 橋本関雪展 京王百貨店 一九七三年 一月四日—十七日)。

文献6 『橋本関雪』(アサヒグラフ別冊美術特集 日本編66 朝日新聞社 一九九二年二月)。

文献7 中国国家文物事業管理局編『中国名勝詞典』(上海辞書出版社 一九八一年十月)。

日本版 鈴木博訳、村松伸解説『中国名勝旧跡事典 卷二、華東編(べりかん社 一九八七年三月三十一日)

同卷三 華北Ⅱ・中南一篇(一九八八年三月三十一日)。

同卷五 西北・西南篇(一九八九年六月三十日)。

文献8 和泉新編『現代 中国地名辞典』(学習研究社 一九八一年十一月一日)。

- 文献9『中国古今地名大詞典上中下』（上海辞書出版社 二〇〇五年七月）。
- 文献10 岸田吟香編『大清一統輿地分図』（小川寅松・田中良三刊 明治四十一年＝一九〇八、六月三日）。
- 文献11 張其昀他『中華民國地圖集』中国南部・北部（国文研究院 中華民國五十二年＝一九六四、十月再版）。
- 文献12『中国大地図』（京文閣 一九七三年）。
- 文献13『中華人民共和国地図集』（地図出版社 一九七九年十二月）。
- 文献14 中国城市地図集編輯委員會編『中国城市地図集』上下（中国地圖出版社 一九九四年六月）。
- 文献15 国家文物局、湖北省文物事業管理局『中国文物地圖集』湖北分冊上下（西安地圖出版社 二〇〇二年十二月）。
- 文献16 浙江省測繪局『浙江省地圖冊』（地圖出版社 一九八一年九月）。
- 文献17『四川省地圖冊』（成都地圖出版社 二〇〇四年四月第二版）。
- 文献18『江蘇省地圖冊』（中国地圖出版社 二〇〇五年二月）。
- 文献19『世界地理風俗大系』3、支那篇下（新光社 昭和五年＝一九三〇、七月十七日）。
- 文献20 常磐大定・関野貞『中国文化史蹟』4（法蔵館 一九七五年七月十日）。
- 同6（一九七五年十月十日）。
- 同10（一九七六年七月十日）。
- 同解説上（一九七五年四月二十日）。
- 文献21『中国名所大観』（日本版 柳井日日新聞社 平成六年＝一九九四）。
- 文献22 南宋陸游『入蜀記』六卷（知不足齋叢書）。
- 原玄朗注訳『入蜀記詳解』（明治四十五年＝一九一二、七月

二十一日）。

岩城秀夫訳注『入蜀記』（東洋文庫 平凡社 一九八六年十二月十六日）。

文献23 竹添井井『棧雲峽雨日記並詩草』（中溝熊象版 明治十二年＝一八七九、三月）。

岩城秀夫訳注『棧雲峽雨日記—明治漢詩人の四川の旅』（東洋文庫 平凡社 二〇〇〇年二月九日 原本の影印本が汲古書院より出版されている）。

文献24 題簽『行川必要図攷』内題『峽江図攷』二卷（文盛書局 光緒十五年＝一八八九、明治二十二年）。

文献25 山根倬三『長江大観』（東方時論社 大正六年＝一九一七、十月三十一日 復刻版 昭和四十九年＝一九七四年、九月二十日）。

文献26『揚子江案内全』（第三艦隊司令部 昭和十一年＝一九三六、七月）。

文献27 蘇丹丹、戴紀明『中国長江三峡』（東方出版社、新大陸出版社 一九九三年十一月）。

文献28 劉家信『中国長江三峡全景』（中国城市出版社 一九九七年五月）。

文献29『長江三峡』日本版（中華人民共和国国家旅遊局）。

# 注

(1) この書の扉には三峡を描いたと思える水墨画を配し、「歳時乙卯（大正四年）三月：東山淨因室関雪微史（関雪印）」と書かれ、出版時に描かれたことが知れる。扉裏には「大正四年乙卯春三月刊」と見える。

(2) 文献4素描集(一)によると「一 鉄嶺（遼寧省の北東部 東門外）」、「(三) 奉天（遼寧省瀋陽市）」、「(四) 奉天

- 城外」、「(五) 長春(吉林省)停車場」、「(六) 滿州軍總司令部」(以上明治三十八年)當時滿州(今の東北諸省)の地を明治三十八年に旅したことがわかる。卷中第一詩はこの旅と大正二年の旅を背景としている。本文注参照。
- (3) 巴蜀は今の四川省。三峡下りの出発点重慶は巴、成都は蜀の地。

(4) (2) 参照。

(5) 末尾の結びの文参照。

(6) 分賦とは条理を立てて述べる意。

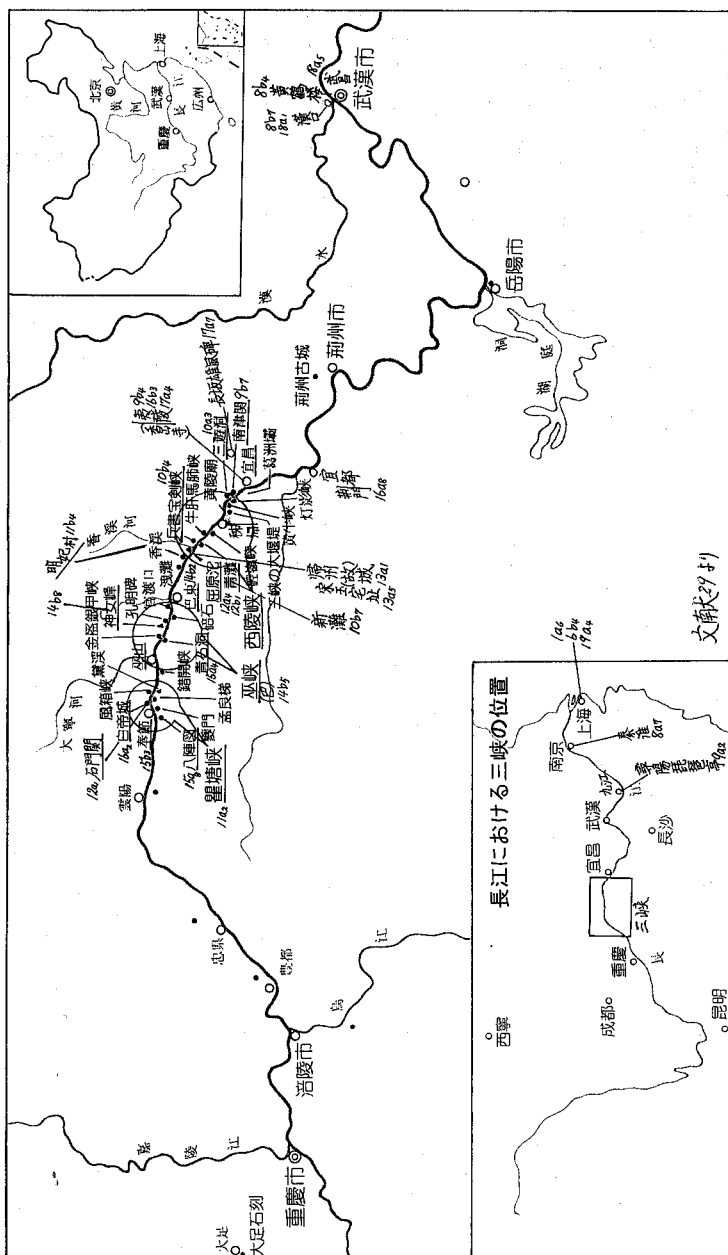
(7) 大正二年以降のことであるが、文獻4の素描集(二)の序文に金子桂華氏が「又揚子江に出て、南京に下り蘇州や杭州とこの辺りで充分日程を写生に費し、又上海にもどり、ここから南海に出て舟山列島の中の小さな普陀山に渡り、全島にある三四十ヶ寺を巡り再び本土(寧波)にもどり云々」と書いている。寧波は浙江省の東部、杭州湾の南、蕭甬鉄道の終点。舟山列島は今は定海県と普陀県所轄であるが、或は普照寺は普陀寺の誤りか、長江へはここから上海に出て遡上した可能性もある。

(8) 柯橋は文獻4素描集に「三一 於柯橋」(大正二年)が見える。

(9) 浙江省桐廬県北五里(『読史方輿紀要要覧』)。

(とちお・たけし 成城大学教授)

長江三峽略図



文獻(294)